

Bleak House—二つの語りの交叉

西 條 隆 雄

I

この作品は‘omniscient’な立場から語る34章と、Estherという女性が自分の半生を語る33章から成る。一見この二つの語りは二分し、各々別個の世界を形成している風に見えるながら、実は緊密に結びあわせられ、渦巻が一点に凝集してゆくにも等しい構成をもっていることが指摘できる。

開巻は霧とぬかるみの強烈な汚さの描写にはじまる。まず Lord Chancellor が登場する。11月の天候は霧と雨。まるでノアの洪水がひいたあとのようにロンドンのぬかるみは汚い。工場の煙がススの雨を降らす。まるで「太陽の死を弔う」かのようにである。また‘if this day ever broke’¹と書かれているように、光と闇の対照を極立てながら、霧と泥濘とススの雨でまっ黒なロンドンの中を、犬が馬が人が、よごれ泥をはねかけられ倒れている情景が描かれている。ロンドンの情景は、何かをにおわせる如く強烈で象徴的である。

この象徴的な霧の描写を背景として大法院の世界がくっきりと浮かび上がってくる。大法院の世界はそれ自体で具体的な世界であるばかりでなく、同時にヴィクトリア朝社会の諸相を象徴しているとも考えられそうである。というのは、この作品には、社会制度・社会制裁のゆがみ、人間の道徳的宗教的態度の偽善的世相が巧妙にかつ皮肉に描き出されているからである。正しい裁きを与えるはずの大法院は、訴訟提出者をくいものにして自らの私腹をこやす弁護士連中の巢となり、惨憺たるスラムの放置はいかなる善良な市民を

もその害毒にさらさずにはおかない。先例と慣習の汲々とした世界に閉じこもり、変りゆく世の動きに対応できず衰亡の一途をたどる上流社会から、官界、法曹界、一般社会及びスラムに至る一大社会図が精細に描き出されており、その中で個人がいかにかに害され毒されてゆくかが如実に記録されている。

その社会図とそこに流れる精神に関しては、‘omniscient’な語り手が独占的に描いており、それを作品の中心だと考えれば、大法院、Chesney Wold 及びスラムをはじめとするおぞましい現実のみごとくに理解されうる。だが逆に Esther の語りがほとんど不必要にさえ感じられるのは何故であろうか。太陽が消え、霧にとざされ、泥と雨にみまわれた世界の対極として、明るく、慎しく、献身的な Esther の存在価値を強調するのは至極当然であろうが、その場合は奇妙に作品の分裂を意識させる。二つの語りを用いることによって作家はどのような構成を求めていたのであろうか。

出生時に一つの影を宿した Esther は、伯母の亡くなった後、Jarndyce に引きとられ、6年の学校生活を送ったのち「荒涼館」へ旅立つ。これは第6章である。1・2章の霧・雨・泥濘の色調は格別強烈であるが、3・4・5章もまた濃い霧につつまれたロンドンの場面となっている。ところが6章では、それまでの章とはうって変って太陽がさんさんと輝き、しかも「西へむかうにつれてますますうららかなになった」のである。その太陽の照る中を馬車は一路「荒涼館」へむかう。ここに「光と闇」、ひいては「生と死」というパターンが明瞭に観察されるが、更に「荒涼館」という邸の象徴的意味を考える時、これは一層明瞭になってくる。

「荒涼館」とは、その名が与える意味とは異り、愛と休息の邸となっている。この主である John Jarndyce は、作品のあちこちにおいて高潔で情深い慈善家として描かれ、孤児となった Ada, Esther には‘father’のイメージ²でとらえられているようである。その彼は、いやなことを聞いたり、話が目下係争中の訴訟事件のことになると、風向きの変ったことを理由にすぐ‘Growlery’³と名づけた自室に引きこもってしまう。不愉快なことはす

べてこの一室に閉じてこめていることもあってか、「荒涼館」は殊の外明るい印象を与えている。

そもそもこの邸の歴史をたどると、Tom Jarndyce の生きていた頃は 'Peaks' という軽快な名で呼ばれていたのであるが、彼は例の 'Jarndyce and Jarndyce' 訴訟事件にまきこまれ、文なしとなったあげく、絶望のはてに脳天をぶち抜いて亡くなってしまう。そのあと荒れるにまかせていた家屋敷を John が現在の形に修復したのである。'bleak' であった家を 'Bleak House' と名づけてここに住んでいる John は、いろんな形で社会慈善に手をさしのべ、かつ訴訟事件からは理性的に身をひいている。また物語の最後においては、Esther と Allan Woodcourt が結婚すると、その祝いとして全くうり二つの「荒涼館」をたて、二人に送っている。以上から考えると、John は引きついで荒廢——広くはヴィクトリア朝の荒廢ともいえようが一——をいましめとして、これを行動の基盤とし、社会の建設に微力ながら努力している人間であろう。親子の間で、法と国民の間で、牧師と信者の間で、その他いろんな形でみられる社会の 'bleak houses' とは異り、ここは休息と救済の邸と考えられるのである。

以上のように、名が表わす意味とは逆の象徴的な意味をもつ「荒涼館」にむかって Esther が旅する時、太陽はさんと輝き、Jarndyce から送られてきた荷馬車の鈴の音を聞いて「私達三人はその鈴の調べにあわせて歌い出したい」ほどであった。作品はここにおいて明瞭な構造を呈している。即ち Esther が Chancery 及び Chesney Wold の霧・闇・泥濘をぬけ出し、愛と救済の邸へむかうということになる。彼女は「影」を宿した女性であるが、名前は 'Summerson' 即ち 'summer sun'⁴ であり、彼女からその影がどのような形で払拭されてゆくかが、Esther の語りに課せられたテーマであろう。そして、それは彼女の「荒涼館」へ向う旅の中に寓意的に凝縮されているようである。

第6章で彼女が「荒涼館」へ旅する途中、日は暮れ、星あかりの夜道はい

つしか急な上り坂となる。この夜道と急坂とは、後に Esther が盲目となって病床に伏し闘病生活を送ることになることを予示していると読みとることができそうである。その闘病生活の間に、懸命に救済を求めて上昇しようとする彼女の無意識の自我が夢となってあらわれている (XXXV, 488-9)。闘病生活を終えた時、彼女の美しい顔には傷が残る。この傷こそは、彼女の罪の子としてのみえるあらわれであり、後に説明するように、霧・闇・泥濘にあらわされる諸々の社会の罪のあらわれでもあろう。このようにして両親の、そして社会の罪を背負わされた Esther は、その私拭と一人間としての道徳的義務の遂行にすべてをゆだねつつ、愛と奉仕と自己否定に生きてゆく。旅の目的地である丘の頂上の邸についた時、内側から開かれた扉から戸外の闇にあふれ出た光こそは、闇と対立する救済の邸を如実に物語っているであろう。

II

以上の構造を念頭において二つの語りを考える時、‘omniscient’な語り手による法曹界の頹廃、Chesney Wold の衰微、Tom-all-Alone’s の貧困の悲惨さはとうてい謙虚な Esther の筆では描ききれないであろう。しかも‘omniscient’な語り手は作品中すべて現在形を用いており、その永続する姿としての把握がとりわけ鮮明である。従って、いまのべたテーマを展開するに当たり、二つの語りはどのように関連しあって有機的全体を作りあげているのであろうか。まず第1分冊(1~4章)を考察することによって、その糸口を求めたい。

第1章は霧とぬかるみのロンドンの描写にはじまる。その情景描写にあたり、動詞は現在分詞以外は使っていないことが極立っている。霧はありとあらゆるところを濃くつつんでいる。路上はぬかるみ。Megalosaurus に出合ってもおかしくないほどの初原的大洪水のあとを思わせるほどだという。視覚的イメージがいかに強い。いや Garis のことばを借りれば、‘We do in-

deed “see” the Megalosaurus and the horses, . . . and seeing is believing¹⁵ である。作家の巧みな語りは読者をずんずんその情景の中へ引きづりこんでゆく。

だが、‘Fog everywhere.’にはじまる視覚的な描写は尖鋭化し、次の描写を生み出している。

The raw afternoon is rawest, and the dense fog is densest, and the muddy streets are muddiest, near that leaden-headed old obstruction, appropriate ornament for the threshold of a leaden-headed old corporation: Temple Bar. And hard by Temple Bar, in Lincoln’s Inn Hall, at the very heart of the fog, sits the Lord High Chancellor in his High Court of Chancery. (I, 2)

霧と泥濘はもはや単なる情景ではなく、想像的実在へと変ってゆく。大法院をはじめとする法曹界の遅滞とゆがみを象徴する方向へと広がりをはじめ。弁護士は‘as players might’と役者に墮し、一事件が子・孫の代まで延々と伸び、弁護士連中のみが訴訟人を犠牲者として大もうけしている事実、マットをしきつめた泉（法廷）の底には真実をいくら探しても無意味であることがいとも直載に描かれている。

この大法院で、目下係争中の‘Jarndyce and Jarndyce’訴訟事件が姿をみせる。そのはじまりから歪められ、不要な枝葉が次々とつけ加えられたこの事件は、無関係なものの調査と審議に多大の金と時間と労力を投入し、現在は誰一人としてその訴訟の意味さえしらない。弁護士連中ですらこの件に関しては何一つ意見の一致をみることはなく、膨大な先例と書類の山、その他数々の関連事項の中に埋没し、解決はおろか解決のメドさえつかぬ好事例として、弁護士仲間の間では一つの‘joke’にまでなり下っている。

詩的にかつ象徴的に描かれた第1章は、法の歪みと非道を浮きぼりにし、これだけで一つの完成した作品と考えてもいいほどであろう。これは以降の

展開を序するばかりでなく、Dedlock家の停滞もスラムのひどさも含め、作品全体を包みこむ巨大なヴィクトリア朝社会—‘Chancery World’—の導入部ともいえるであろう。

次いで第2章は准男爵 Sir Leicester Dedlock の邸宅を描いている。Rip Van Winkle とか Sleeping Beauty になぞらえられて、眠りこんでしまって世の変動に気づかず、過去を踏襲することにのみ明けくれる社会のミニチュアである。一見、第1章とは無縁に思われるこの社会は、‘as the crow flies’ (II, 8)⁶ と、無視してもいいほどのささやかな比喩によって結ばれている。黒さ、不気味さにおける同一性の故であろうか。ともかくこの邸、ひいては ‘world of fashion’ は、1章の Chancery に似て、雨と洪水の中に設定され、その雨と洪水はしばしば Sir Leicester の考え方のパタン及び最後には邸の衰亡を表象するもの⁷となっている。

その否定的、無感覺的、生命消失の姿は、Dedlock という名前の中に既に含有されており (to be in a deadlock is to be at a standstill), 系譜的にも、政治的姿勢においても、この家系に近づきつつある運命はさけ難く、その消長が危ぶまれる。雨と洪水のただ中に設定されたこの邸は、明らかに光・生命を対極とする世界であろう。次の表現などはそのことを明確にのべている。

It is not a large world. . . . It is a world wrapped up in too much jeweller's cotton and fine wool, and cannot hear the rushing of the larger worlds, and cannot see them as they circle round the sun. It is a deadened world, and its growth is sometimes unhealthy for want of air. (II, 8)

また、‘Ghost's Walk’ (II, 9) と名づけられたテラスに、夜重い雫がピタピタおちる音にも、今後の運命が感覚されるが、更にこのテラスには古くからの伝説も加わって、近づきつつある運命のミステリーは更に加速される。邸

は 'a fairyland to visit, but a desert to live in' (II, 11) とも表現されている。

このような暗示とミステリーにみちた、いわば舞台装置のト書ともおぼしき描写の中を登場してくる Lady Dedlock に、この章のすべての焦点がかわされる。彼女の描出はまず次のような屋敷の描写からはじまる。

My Lady Dedlock's 'place' has been extremely dreary ... The view from my Lady Dedlock's own windows is alternately a lead-coloured view, and a view in Indian ink. The vases on the stone terrace in the foreground catch the rain all day; and the heavy drops fall, drip, drip, drip, upon the broad flagged pavement, called, from old time, the Ghost's Walk, all night. On Sundays, the little church in the park is mouldy; the oaken pulpit breaks out into a cold sweat; and there is a general smell and taste as of the ancient Dedlocks in their graves. (II, 8)

屋敷は 'dreary' であり、窓外のながめは「鉛色か真暗のながめ」である。光はおろか、万物の生の息吹きを感覚させるものは何一つみえない。あるいは住人にはそれが見えなくなっているのであろう。ちなみに、夫人が窓外にみる愛情あふれる一家庭の情景も彼女には何一つ感興をおこさず、夫人は 'bored to death' と一言のべるだけである。

窓外には「鉛色か真暗のながめ」をみ、すべて周囲の出来事には 'bored to death' とのべる以上の関心を示さぬこの夫人の内部に、どのような思いが去就しているのか、我々には推察しようもない。しかし、'omniscient' な語り手は rumour に語らせることにより、夫人の素姓を皮肉をこめて描いている。(1)家族がないこと(多分生れを隠している)(2) Sir Leicester と結婚したことを、アレクサンダー大王が全世界を征服したことになぞらえ、その大征服たる結婚以後は冷やかな態度に変じていること、しかも彼女の落

着き、静けさには疲労と困憊が極立っている事実（自分の本来の姿をひた隠す努力をしている）(9)彼女の美貌は貴族のおもむきというよりは可憐というにふさわしく、ことば、物腰、身づくろいは生後に獲得し身につけたもので、生来の貴族の物腰ではない、というのである。

変貌に立脚し、過去を凍結した Lady Dedlock に対し、この章はいかにも劇的な構成を用意している。おかかえ弁護士の Tulkinghorn は細心の注意を払い、必要以外は一切口を開かぬ男である。上流人士の家庭の秘密を握り、‘silent depository’ (II, 11) の異名をもつと通り、口外こそしないが、それを盾に金と牛耳る力をほしいままにしている。その彼が、ある書類を（明白に意図しつつ）夫人の脇の机の上に置く。そして、彼女の訴訟事件ともなっている ‘Jarndyce and Jarndyce’ の成行を Sir Leicester に説明している。夫人が何気なくそれを見、「誰が筆写したの」と尋ねた時、内心の動揺を隠しきれず彼女の声はいつになく高い。そのすぐあと彼女は気絶し、別室へ運ばれてゆく。‘I have been quite alarmed. I never knew my Lady swoon before’ (II, 14). と Sir Leicester がのべる如く、彼女の気絶は尋常ではない。この一件が原因となって以後夫人の素姓が Tulkinghorn によって克明に調べあげられてゆくが、ここに至ってはじめてプロットがいかにも劇的な展開をみせている。

次の3・4章は、Esther による1人称の語りである。1・2章の力感あふれる描写とは異なり、淡々とした回想による自伝である。しかしその自伝の中に、彼女の出生に関して次のようなことばが伯母の Miss Barbary から投げつけられている。

‘Your mother, Esther, is your disgrace, and you were hers.’ /
‘It would have been far better, little Esther, that you had had no birthday.’ (III, 17)

更には、彼女に毎夜聖書を読ませていた伯母が、Esther 14才のある夜、

‘sinful woman’ の件りでイエスが “He that is without sin among you, let him first cast a stone at her.” (*John*, viii, 7) とのべたところを読んだとたん、伯母は “Watch ye therefore!” (*Mark*, xiii, 35) といったかと思うと動転して卒倒し、1週間あまり後には亡くなる。

いかにも異例で衝撃的な出来事である。のちにわかることであるが、この伯母は Lady Dedlock の姉にあたり、厳しすぎるほどの戒律を信奉する女性であって、Boythorne と婚約していた折に、妹が愛人の Hawdon との間に Esther をもうけ、その後愛人をすてて Sir Leicester と結婚したため、伯母は婚約を解消し姓をかえて、Esther を育ててきたのであった。だがその事実は、現時点においては作家により固く秘されている。そしてその出来事は異例な出来事として以外読者には理解されようもなく、作品はここにおいてもまた大きなミステリーの障壁を築いている。一方、Hawdon に関しては、M. Spilka の指摘するように、餓死の床に強くおうアヘンの異臭 (X, 137) から考えて、熱烈に Lady Dedlock を愛していたことは間違いないであろう⁸。

ところで身をよせるところのない孤児となった Esther は、Jarndyce 氏の保護により数年間教育をうけた後、「荒涼館」へ行くことになるが、その途中、アフリカ問題に首をつっこみ ‘Household Mismanagement’ でしられる Mrs. Jellyby の家 (これも作品中の ‘bleak houses’ の一つである) に滞在する。以上が第1分冊である。

言葉・表現・時制・音調・内容においてこのように異なる二つの語りを提示した作家は、恐らく、遂には融合する複数概念はその距離が大きければ大きいほど、融合する時に感じる劇効果も大きいと考えていたのであろう。第1分冊を全体の一部としてながめる時、構成の渦巻は、訴訟事件と Lady Dedlock と Esther を包んで静かに円を描きはじめたといつてよいであろう。一見、関連がないかのように配置された各々の場面間の距離を、作家は ‘gulf’ と表現し、かなり後になってではあるが、次のように語っている。そ

れは作家の、計算された物語構成を語っているともいえるであろう。

What connexion can there be, between the place in Lincolnshire, the house in town, the Mercury in powder, and the whereabouts of Jo the outlaw with the broom, who had that distant ray of light upon him when he swept the churchyard-step? What connexion can there have been between many people in the innumerable histories of this world, who, from opposite sides of great gulfs, have, nevertheless, been very curiously brought together!

(XVI, 219)

III

作品の二つの語りの相互関係を考えたのは、W. J. Harvey が最初ではなかったかと思われる。彼は 'systole' (心臓収縮) と 'diastole' (心臓弛緩) ということばで二つの語りを表現し、それが 'pulsation' の如き効果を与えながら Lady Dedlock 追跡へと収斂してゆくのだという⁹。二つの語りの性格はかなり明確に識別されてはいるが、相互関係についてはそれ以上深く分析していないので、説明不足はまぬがれない。

二つの語りの交叉に着目し、小説史上の画期的成功の一つとしてその手法を認めているのは D. W. Jefferson である¹⁰。彼によれば、語りは二つになっているが、相互関連はまもなく始まり、作品は 'one exceptionally rich whole' を経験させてくれるとして、以下のように説明している。

まず、Guppy なる法律見習生が二つの語りの間を頻繁に往復し、Esther と Lady Dedlock の酷似の源泉をたどり、ついに 29 章で夫人の前に彼女の隠された過去を全面的にのべていること。次いで病気あがりの Esther が Chesney Wold で偶然 Lady Dedlock に出会う場面がある。ここは作品の最も中心的な交叉となっており、彼女に会ってはじめて夫人の、これまで凍

結してきた感情が一気に流出してくる。二人はこれを最後に生きて出合うこととはなく、それだけに一層美しい交叉となっている。そして最後に、Bucket による Lady Dedlock 探索の中へ Esther がまきこまれる。敏捷に行動し、独特の勤を働かせる警部と彼女の追走は、作品を急速に完結へと導き、彼女の語りの中へ作品全体が合流する。59章において父親の墓前で死体となった母を発見したところで、二つの語りの合流は完成する、とのべている。

しかしよく考えてみれば、Jefferson の考える合流は作品のミステリー一解明に寄与する意味での合流としてしかとらえられていない。第1分冊で謎に つつまれたまま静かに円を描きはじめた渦は、どのようなテーマを展開しようとしているのであろうか。それをみるには、Esther の語りを再吟味しなくてはならないと思われるのである。

‘Omniscient’ な語りは、どの1章をとっても、設定された舞台で一つの劇が深く進行している感じを与えるのに対し、Esther の語りは因果関係・時間的経過によって色々な出来事をのべてゆくことに主眼をおいている。加えて、かなり作品がすすむまでは、彼女の役割ははっきりしないのである。しかし、彼女の語りには、時として予見的・暗示的描写が少くない。例えば、5章の Krook’s shop の描写と6章の「荒涼館」の描写などは、その典型であらう。

Esther が Krook の店を訪ねた時は ‘foggy and dark’ (V, 50) であり、店主は Lord Chancellor と自称している。彼は訴訟の書類をはじめとして何でも手当たり次第に買いこみ、決して売ろうとはしない。大法院及び目下係争中の例の訴訟事件が寓意的に象徴されていることは明白である。Krook が ‘as if he were on fire within’ (V, 50) と形容されているのは、やがて彼が、ひいては訴訟事件が、‘spontaneous combustion’ をおこすことの前兆であるし（事実、訴訟事件はロンドンの屋敷財産を訴訟費用が上まわったところで消滅している）、あるいは、内部矛盾にみちた社会はいつか崩壊しなければならぬことを意味するものともなろう。また、ごく無造作に彼女の

目にとまった広告のだし主が、まさか実父であろうとは誰一人気づかない。

‘a respectable man aged forty-five wanted engrossing or copying to excute with neatness and despatch: Address to Nemo, care of Mr. Krook within’ (V, 50)

更に、この Chancellor が ‘Yes. There was the name of Barbary, and the name of Clare, and the name of Dedlock, too, I think.’ (V, 53) とつぶやく時、第1分冊の一見唐突にみえる世界は突如として一つの渦中にまきこまれてくる。ここに下宿している Miss Flite は、彼女の飼う小鳥の名前を通して、大法院における訴訟の何たるかを雄弁に語っているが（そしてそれは Richard Carstone がたどる運命でもあるが）、Esther もまた訴訟事件にまきこまれることが小鳥のメタファーで暗示されている¹¹。

[Krook's] cat looked so wickedly at me, as if I were a blood-relation of the birds upstairs. (V, 57)

最後に、Tom Jarndyce が自殺したのはこの店であったし、例の訴訟事件を解決させるのに有力な書類もここから発見されることをつけ加えておこう。

次いで、「荒涼館」に到着した時の邸及び各人にわりあてられた部屋の描写には、各自の運命が微妙に象徴されていることも見逃してはならない。Esther の部屋には暖炉の火が赤々と燃えていた（愛の炎）。Ada の寝室の窓からながめた ‘great expanse of darkness’ (VI, 65) には、夫との死別が暗示されてはいないであろうか。Richard の部屋は ‘a comfortable compound of many rooms’ (VI, 66) のようだとあるのは、法律家をめざし、医者を目指し、ついには将校の地位を買ってもらっても結局生来の目的性のなさから、あげくのはてには ‘Jarndyce and Jarndyce’ に引きづりこまれた彼の運命の絶妙なたとえになっている。Jarndyce は ‘plain room’ に寝おきし、堅実で平明な生き方があらわされている。更には、彼が二人のいと

こをみる目が 'thoughtful' (VI, 72) と表現されているのも、二人の未来を投影した表現であることが理解できよう。

以上のように、Esther の語りには予見的、暗示的な描写が比較的早くあらわれている。しかし彼女にふりかかる運命及び彼女がはたす役割に関しては、Dickens はおどろくほど寡黙である。そしてその寡黙ゆえに作品は片時も緊張をくずさない。彼女は Miss Barbary に 'a life begun with such a shadow on it' (III, 18) といわれる度に、'... I would try, as hard as ever I could, to repair the fault I had been born with ...' (*ibid.*) と人形に語っている。この 'shadow' とか 'fault' という語が実際に明確な形をとるのは、My Lady—Captain Hawdon—Esther の三人が一線上に浮んでくる時であり、彼女の運命、役割が詳らかになってくるのは、その時からである。その時までには、'omniscient' な語り手は、様々な Lady Dedlock の行動を通して、ミステリー—解明の準備を行っている。まず2章では書類の筆跡をみて気絶する。Nemo なる人物の死を Tulkinghorn が夫人に告げる12章には、'On the Watch' といかにも暗示的な章題がついている。16章では、夫人は召使いの服装に身をくろみ、Nemo の葬られた墓場を訪ねている。他方、Esther の語りの中では、彼女がはじめて Lady Dedlock に会った時の模様を、何故か幼い日々の回想へ誘われると、二度三度くり返しのべている (XVIII, 250; XXIII, 318)。このように、各々の語りの中で様々な準備がなされてはじめて、29章における Guppy の一大陳述が行われている。この中で明確になったのは親子の関係ばかりでなく、Chancery, Chesney Wold, 及び Tom-all-Alone's が一線上に結びついてくる。

だが丁度その時、意味深長にも、Esther は Jo のもたらした病原菌に感染し、病に倒れる (XXXI)。そして病から回復した時、彼女の顔には傷が残る。三つの世界が一線上に結びついた時、彼女が病に倒れ、しかも回復後傷を残すという点は象徴的である。

象徴的であるというのは、Esther が Jo を引取りに Jenny を訪ねてゆく

夜の描写に、既に追ってくる運命が如実に予兆されているからである。その描写には、とりわけ Norman Friedman が適切に注釈を加えているので、それを引用したい。

It was a cold, wild night, and the trees shuddered in the wind, . . . The sky had partly cleared, but was very gloomy—even above us, where a few stars were shining. In the north and north-west [toward Chesney Wold], where the sun had set three hours before [the light of the dying sun has been encountered at least twice by now], there was a pale dead light both beautiful and awful [Lady Dedlock's emblem]; and into it long sullen lines of cloud waved up, like a sea stricken immovable as it was heaving [surely a strikingly appropriate implication regarding Lady Dedlock's languor which masks her frozen passion]. Towards London, a lurid glare overhung the whole dark waste; and the contrast between these two lights, and the fancy which the redder light engendered of an unearthly fire [Inferno], gleaming on all the unseen buildings of the city, and on all the faces of its many thousands of wondering inhabitants, was as solemn as might be. (XXXI, 429)¹²

更につづいてテキストには 'I had for a moment an undefinable impression of myself as being something different from what I then was.' という表現が出ている。Chesney Wold の恐ろしくも美しい光とロンドンの不気味な輝きが殊更壮重に描き出され、それをみる Esther が自分を別人に感覚するとは、どういうことであろうか。これは、三者がやがて一体化すること、いいかえればこれまで別々に展開してきた二つの語りがここで合流するという意味を含んでいるのではないであろうか。ここは作品の一大転期を画

するところである。そして作品はここを支軸として、結末へむかって更に加速的に旋回してゆく。

Esther が盲目になった次の章 (XXXII) は ‘It is night in Lincoln’s Inn.’ ではじまっている。これは単なる偶然ではないであろう。彼女の盲目は一個人の盲目ではなく、両親の罪、大法院の無責任、ロンドンのスラムといったものが同一の次元で彼女の盲目と一体化していることのあらわれではないであろうか。逆にいえば、‘blind’ と ‘night’ が並置されていることは、Esther が社会の諸々の弊害・疾病にまきこまれたことと解釈することも可能であろう¹³。

以上のように考えると、彼女が病の床でみる夢は非常に意味深いものとなる。まず、病気になって、彼女は ‘dark lake’ (XXXV, 488) を渡り、過去のすべての経験を健康の岸辺に残してきたようである、とのべている。‘dark lake’ とは、彼女をおおっていた ‘shadow’ の本源ではないのか。次いで、天まで届く階段を必死でのぼりつめようとしてのぼりきれない、という夢が描かれる。明らかに上昇という形での救済の旅が感覚される。そして「病がもっとひどくなった時には、巨大な闇の中に炎となってもえるネックレスだか指輪だか、あるいはピカピカ光る円形状のものが数珠繫になっていて、その玉の一つが私で、私だけはそこからはづして下さいと必死に祈っていた」とある。

この ‘flaming necklace’ (XXXV, 489) は、両親の罪をはじめ、社会の諸々の偽善・徳の荒廃を含んでおり、そこから逃れようと必死にあがいている Esther の無意識の姿を写しているといえよう。このことは、先に第6章についてのべたことを考え合わせれば、作品の構成上、その中心部を占めていることが理解できるであろう。

病氣回復後、Esther は Boythorne 家に逗留する。このとき「自然のたたずまいの一つ一つが以前よりも一層美しくすがすがしくみえ」、「心機一転して再出発しよう」と彼女は自分に誓っている。「最悪を知って落着き」、ま

た「かわいそうな人に対して思いやりと慈愛をさしのべるのがやさしい人間自然の情だ」ということを、いろいろな出来事を通して学ぶのである。「最悪」からぬけ出し、心の変化に相応するごとく容貌も以前とは違った Esther が、ここではからずも母親と出合うことになる。この時はじめて、彼女は自分に負わされた 'shadow' の由縁を認識するのである。作品はこの出会いを頂点として、以降は母親の罪、Esther の影の払拭に向っている。

‘Omniscient’ な語りは、二人の出合いのあと、Lady Dedlock と Tulkinghorn の間の一髪触発的な関係を主に描いてゆく。窮地に追いこまれた夫人の心中を、例えば次の挿話などはみごとに描いている。

選挙に全力をあげている Dedlock 家の人々の間で、Tulkinghorn が持ち帰る情報のことで一同が彼のうわさをしている時、屋外で銃声が聞こえる。一同はギクリとするが、窓辺にいた夫人は ‘A rat. They have shot him.’ (XL, 569) と一言答えている。できるものなら殺してやりたいと思う夫人の心中と、彼がやがて何者かに殺されるプロットのミステリーをうまく伝えてすぐれている。

さて、その夫人の最後の談判が Tulkinghorn との間ではじまろうとする直前、彼は何者かに暗殺される。Bucket の目をみはる活躍に事件は落ち着するが、広がるうわさにより Dedlock 家の家名に恥辱のふりかかるとを恐れて、彼女は逃亡する。警部は Esther を追走に参加してもらい、この部分から物語は ‘omniscient’ な語りと Esther の語りが混然一体となって、作品は早いテンポで結末へと急ぐ。そして、59章にいたって、ボロ服ととりかえた母親が例のスラムの墓場で冷たくなっているのが発見される。夫人が本来の人間感情に立戻り、連綿たる私情を語るのは、Esther に会った時だけ (Hawdon に許した時、Sir Leicester の愛の告白に折れた時、及び 29章の終りで動哭する場面を除けば) であるが、彼女がボロ服に取換えたことは、これまでの偽りの生活をすて本来の自分に立戻ったことを意味するのである。彼女は、無責任な世界からの脱却を死をもってあがなったのである。従

って、母を追跡するということは、Esther にとっては彼女につきまといいた 'shadow' を払拭することになる。事実、彼女が追走に参加する頃から天候は雪となっている。St. Albans にも、また Chesney Wold にも降る雪は、Lady Dedlock の罪の、そしてまた Esther の 'shadow' の浄化を何よりも明白にあらわしていると考えられるのである。

作品が終った時点で、Chancery に象徴される宗教的・道徳的頹廢の世に住む人々の運命はいかにも暗い。Ada は夫をなくし、Jarndyce は Ada とその娘との三人ぐらしの生活に戻り、Caddy に生まれた子供は不具者である。人は何らかの傷をうけずには生きてゆけない。逆に、法曹界、Smallweeds 及び Chadband などは、我世の春を楽しんでいる如くである。

このような世界にあって、Esther と Allan はまさに悲哀と絶望から救出し、愛と善の推進に大きく貢献する源泉となっている。60章で Jarndyce がもう一つの「荒涼館」を Allan に送る時、彼を 'a man whose hopes and aims may sometimes lie . . . above the ordinary level, but to whom the ordinary level will be high enough after all, if it would prove to be a way of usefulness and good service leading to no other.' (LX, 816) とみていることが、最終的には「荒涼館」の意味を最もよく伝えているであろう。頹廢し、価値の逆転した 'Chancery World' に於ては、とりわけ「荒涼館」の存在意義に必要なことを Dickens は描こうとしたのであろう。そして二つの語りにおいても、'Chancery World' は、'omniscient' な語りを通して、telling をできる限りさけ、行動と対話と劇に仕立てて客観的現実を描き出すよう配慮し、一方、作品の象徴的な意味は Esther の語りに限定することにより、ミステリーを主軸として、二つの語りをみごとに交叉、合流させているのである。

注

- 1 Charles Dickens, *Bleak House*, Oxford Illustrated Dickens (London: Oxford

Univ. Press, 1971), chap. I, p. 1. Subsequent quotations are indicated in the brackets by page number, preceded by the chapter number.

2 次の例がある。

‘Dear cousin John, my father’s place can never be empty again. All the love and duty I could ever have rendered to him, is transferred to you.’ (Ada; XIII, 180) / ‘... blesses the Guardian who is a Father to her!’ (Esther; XVII, 337) / ‘He had been the best of fathers to me.’ (Esther; XXXVI, 512) / ‘and all this happiness shone like a light from one central figure.’ (Esther; XLIV, 610)

3 このことばの由来は Addison の ‘Infirmity’ (*Spectator*, No. 440) にある。See *Dickensian*, 59 (May, 1963), p. 124.

4 次の引用を参照されたい。

‘... whenever Dame Durden went, there was sunshine and summer air.’

(XXX, 426)

5 Robert Garis, *The Dickens Theatre* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1965), p. 105.

6 ‘crow’ は、のちに Tulkinghorn の事務所が紹介される時も飛んでいるし (X, 131), 彼が外出する時にもまた出てくる [Mr. Tulkinghorn goes, as the crow came... to Cook’s Court. (X, 132)]. この比喩は Tulkinghorn あるいは法により、二つの世界に行きが行われることをさしているのであろう。Louis Crompton は “Satire and Symbolism in *Bleak House*”, *NCF*, 12 (1958) において, ‘crow’, ‘sear and yellow leaf’ (*BH*, XXIII, 329; *Mac.*, V, iii, 23) とか次の行を引用しながら, Dickens は *Macbeth* を念頭においていたのではないかと指摘しているのは面白い (p. 291).

Light thickens; and the crow

Makes wings to th’ rooky wood;

Good things of Day begin to droop and drowse,

Whiles Night’s black agents to their preys do rouse.

(*Macbeth*, III, ii, 50-53)

同様な指摘は J. H. McNulty, “*Bleak House* and *Macbeth*” *Dickensian*, XL (June, 1944): 188-191 にもみられる。そう考えると, Leicester 卿のいとこが Lady Dedlock について次のようにのべるところは Lady Macbeth を思いおこさせる。

‘... she’s beauty nough—setup Shopofwomen—but rather larming kind—remindingmanfact—inconvenient woman—who *will* getoutofbedandbawthstablishment—Shakespeare’ (XLVIII, 650).

7 例えば次の引用はそのことをよくあらわしている。

‘... the floodgates of society are burst open, and the waters have —a—obliterated the landmarks of the framework of the cohesion by which things are

held together!’ (XL, 570-1)

- 8 Mark Spilka, *Dickens and Kafka* (1963; rpt. Peter Smith, 1969), p. 207.
- 9 W. J. Harvey, *Character and the Novel* (Ithaca: Cornell Univ. Press, 1965), pp. 89-99.
- 10 D. W. Jefferson, “The Artistry of *Bleak House*”, *Essays and Studies* 1974, pp. 37-51.
- 11 小鳥のメタファーについての考察は Q. D. Leavis の分析によるところが大である [“*Bleak House: A Chancery World*”, F. R. & Q. D. Leavis, *Dickens the Novelist* (London: Chatto & Windus, 1970), p. 130]。なお、作品の世界を ‘A Chancery World’ と考え、この世界で各々の人物がいかに扱われているかを考察している点では彼女の論考が最もすぐれている。
- 12 Norman Friedman, “The Shadow and the Sun: Notes Toward a Reading of *Bleak House*”, *Boston University Studies in English*, 3 (Autumn, 1957), p. 163. Reprinted, partly rearranged, in his *Form and Meaning in Fiction* (Athens: Univ. of Georgia Press, 1975).
- 13 同様な、異なる語り手による narration の連続は7章の冒頭にもみられる。

While Esther sleeps, and while Esther wakes, it is still wet weather down at the place in Lincolnshire. (VII, 81)

しかし、ここでは二つの世界の相違が明白に示されており、光と闇、太陽と雨という対照として提示されているにすぎない。そして、この二つの対立した世界が31章に至って融合すると考えられる。

Synopsis

Bleak House : Appraisal of the Double Narrative

Takao Saijo

With each new novel Dickens seems to have tried a new way of writing. In *Bleak House* he uses a double narrative method : of sixty-seven chapters, thirty-four are narrated by the "omniscient" narrator and thirty-three by Esther herself. The former are mostly concerned with the world picture of the Victorian period : the rottenness of the judicial world, the stagnation and deadlock of upper society, and the somber reality of the slums. Esther, on the contrary, tells chronologically the early half of her life ; how she was brought up and how she tried to be industrious, kind-hearted, to do some good to someone, and win some love to herself if she could. Thus most critics find in this novel a dichotomy ; the "Chancery World", as Q. D. Leavis put it, described in its ever present reality is Dickens's serious indictment of society and is essentially different from what Esther narrates, which is the opposite of the horror and despair of the Chancery World.

Dickens's use of the double narrative, however, seems to have been intended to create a great dramatic effect when the two streams of narration come together. The temporal and spatial design of the novel, or *systole* and *diastole*, as W. J. Harvey put it, are well combined in a mystery plot to expose and pursue Lady Dedlock to the end. But the meeting of the two narrations does not bear significance unless we take a close look at Esther's narration. For in it there are various descriptions that

suggest or foretell the later events and also the symbolical effects of the novel. Krook's shop in Chapter Five, for example, is a beautiful allegory of the Chancery and its famous suit, "Jarndyce and Jarndyce," in its internal confusion. Another example is the description of Bleak House, which, apart from it being itself a symbolical house in the novel, assigns different destinies according to the particular room in which each resident lives.

The whole design of the novel is concentrated in Chapter Six, where Esther travels in the sun, after living in fog, mire and darkness, to Bleak House. Her travel in the starlit night and then on the steep slope up to the house symbolizes her later ordeal: sick in bed in her blindness, she dreams of climbing up the colossal staircase (XXXV)—to rest and peace, to Bleak House. But here her blindness assumes more than personal significance. The first line of Chapter Thirty-two, just after she has become blind, begins with, "It is night in Lincoln's Inn." Her blindness and night are placed, as it were, on the same level. We acknowledge that fog, mire and darkness of society are fused in her blindness and she, as a victim, undergoes a purgative suffering. Up to this point, the omniscient narrator presents the various ills of society, together with the dramatic stages that finally culminate in the discovery of Lady Dedlock's hidden past; and Esther with her shadow and fault not yet made clear. When the two narrations meet, Esther is thrown into her ordeal. And after recovery from her illness, she meets her mother and knows for the first time the real cause of her shadow.

After this event, the omniscient narrator inexorably presses in on Lady Dedlock. And finally in her flight and pursuit, the two narrations are so mixed that it is difficult to know one from the other. This phase

of the novel signifies the return to natural feelings on the part of Lady Dedlock, and eradication of her shadow on the part of Esther. The snow that falls on her way in the pursuit tells significantly the purification of her mother's sin and Esther's shadow as well.

The structure of the novel is thus made clear, but still the influence of the "Chancery World" overpowers that of Bleak House and its residents. Dickens seems to build with a desperate effort to create a fable around Bleak House in this harsh Chancery World.